

ヒブ感染症（インフルエンザ菌b型感染症）

特徴と感染経路

- 感染は0～1歳台に多いです。
- 保菌者（症状のない人）の咽頭に菌がいる。 → 飛沫感染する。
- 菌はノドや鼻から侵入し、一部の感染者では血液に入り全身感染症となります。
- 乳幼児で重い病気を起こすことがあります。
髄膜炎、喉頭蓋炎、関節炎、皮下組織の感染、肺炎など

症状と経過

- 潜伏期間は極めて低く、感染後24時間以内に全身に拡がります。
- 症状は突然の発熱（38.5℃以上）と不機嫌で、時にけいれんを伴います。
- 放置すると、時間単位で重症化します（最も怖いのは髄膜炎と喉頭蓋炎）

髄膜炎

- 非常に重く恐ろしい病気です
- 死亡率2～5%、後遺症15～30%
（脳障害、てんかん、難聴など）
- 治療は抗生物質の投与。
しかし、早期診断は非常に難しいです
（発病初期は発熱のみ、血液検査しても分からない）
- 最近では抗生物質の効きにくい耐性菌が増えています

喉頭蓋炎

- 気管入口付近の感染、窒息することがあります

ワクチン

- 不活化ワクチンです。
- 生後2ヶ月以上からの早期接種が望ましく、年齢により接種回数が異なります。
- 接種者の95%以上は感染しなくなります。

肺炎球菌感染症

特徴

- 肺炎球菌は、肺炎などの呼吸器の感染症や全身の重篤な感染症を引き起こします。
- 代表的な症状は、肺炎、細菌性髄膜炎、中耳炎、敗血症です。

代表的な病気と経過

- 細菌性髄膜炎は、非常に重篤な感染症です。
- 発熱、頭痛、嘔吐、意識障害、けいれんなどをきたします。
- 新生児・乳児では症状が明確でないことが多く、発見が遅れる事が多いので注意が必要です。
- 死亡率約10%、後遺症（水頭症、知的障害、運動麻痺、てんかん、難聴など）が、約30%に発現します

ワクチン

- 小児用肺炎球菌ワクチンを使います。
- 不活化ワクチンです。
- 接種対象年齢は生後2ヶ月から接種できますので、できるだけ早く接種しましょう。

ワクチンで防げる病気ガイドライン

～子どもを恐ろしい病気から守るために～

ワクチンで防げる病気はワクチンを受けて予防しましょう！

●兵庫県医師会 ●兵庫県

1.

感染症とは

- ウイルスや細菌などの病原体が、空気・唾液・皮膚の接触などから人の体に入り込み引き起こす病気のことです
- 感染症を防ぐには **1) 病原体を殺す**
2) 体力をつけ抵抗力を高める
3) ワクチンを打って免疫をつける が必要です

ワクチンの種類

- **弱毒生ワクチン** 病気を引き起こす力を弱めた生きた病原体を使用しています
- **不活化ワクチン** 病原体を殺したものを使用しています

ワクチンで防げる病気 (VPD)

- 前もってワクチンを接種することで感染が防げる感染症のことを**VPD**といいます
- ワクチンの種類と病気
生ワクチンで防げるVPD
麻疹(はしか)、風疹、水痘(水ぼうそう)、おたふくかぜ、ロタウイルス腸炎、結核
- **不活化ワクチンで防げるVPD**
ジフテリア、百日咳、破傷風、ポリオ、Hib感染症、肺炎球菌感染症、インフルエンザ、A型肝炎、B型肝炎、日本脳炎、子宮頸がん(ヒトパピローマウイルス)

2. ワクチンで防げる病気として

おたふく風邪

特徴と感染経路

- 唾液腺が腫れます。
- 飛沫感染でうつり、潜伏期間は14日です。

症状と経過

- 主に耳下腺(耳の下)が腫れます(約1週間)。顎下腺(あごの下)、舌下腺も腫れることがあります。
- 押さえると痛いです。
- 熱が出ることもあります。

合併症

- 髄膜炎(15%)…発熱・おう吐が起こります。
- 脾炎(2～5%)…強い腹痛が起こります。
- 難聴(0.1%)
- 年長時では睾丸炎・卵巣炎。

ワクチン

- 弱毒生ワクチン、2回接種すると96%に免疫ができます。
- 米国ではワクチン定期接種開始後ほとんどおたふく風邪が発生していません。
- 日本では任意接種のため接種率が低いので流行が減りません。



水痘（水ぼうそう）

特徴

- 子どもの感染症の中では最も多いウィルス性疾患の1つです。
- 予防接種をしないと9割以上の子どもが7歳までにかかります。
- 「発疹を見ただけでもうつる」と言われるほど非常に強い感染力を持っています。

症状と経過

- 潜伏期間は14日。
- 発熱と発疹はほぼ同時に出現し、赤い斑点の中に水疱（水ぶくれ）ができます。
- 発症後3日間は新しい発疹が次々と出ますが、数日でかさぶたに変わります。

合併症

- 水疱に細菌感染を起こし、化膿します。
- まれに肺炎や脳炎をおこすこともあります。
- 免疫が低下した時に帯状疱疹として再発します。



ワクチン

- 1974年に日本で開発された弱毒生ワクチンですが、現在、任意接種です。
- ワクチンの副作用はほとんどありませんが、1回の接種では免疫が弱く、発症する場合もあります。
- 1歳を過ぎてすぐに1回接種し、その3ヶ月以降にもう1回追加の2回接種が望ましいとされています。

ロタウイルス腸炎

特徴と感染経路

- 乳幼児の冬の急性下痢症で最も主要な原因の一つです。
- 生後6ヶ月から2歳の乳幼児に多くみられ、5歳までにほとんどの小児が経験します。
- 米のとぎ汁のような白色の下痢便が特徴です。発熱を伴う場合もあります。
- 患者の便中に大量のウィルスが排出されます。ウィルスは感染力が非常に強く、どんな環境でも安定しているので、少量でも口に入れば感染します。
- 日頃からの予防方法としては、食事前やトイレの後などにしっかりと手を洗うことが大切です。

症状と経過

- 潜伏期間は約2日で、激しい嘔吐、下痢が特徴です。
- これらの症状は3日から8日程度で治まります。発熱は半日から1日で終わります。

合併症

- 激しい嘔吐や下痢により急激に水分を失い、特に乳幼児では脱水症状になりやすいです。
- まれにけいれんや脳症を発症することもあります。

ワクチン

- 生の経口ワクチンで、現在ではまだ任意接種で自費負担となっています。
- ロタリックス（4週間隔で2回接種）と、ロタテック（4週間隔で3回接種）の2種類があります。
- 生後6週から接種できますが、ほかのワクチンとの同時接種を考えると、生後2ヶ月からが最適です。腸重積症（腸閉塞の一種）が起こりにくい生後6ヶ月までに接種を終えるのが望ましいです。

B型肝炎

特徴と感染経路

- ウィルスを含んだ血液などが皮膚の傷口や粘膜から侵入して感染します。出産時の母子感染（日本では予防対策があり現在では見られなくなりました。）や家庭内感染、性行為が主ですが、感染経路がわからない場合もあります。
- 感染していても症状のない人がいますので、だれがウィルスを持っているかは見た目ではわかりません。

症状と経過

- 3歳ぐらいまでにうつるとキャリア（一生ウィルスを持ち続ける）になり、その約1割が慢性肝炎を発症します。慢性肝炎は肝硬変や肝がんに進行します。残りの9割はヘルシーキャリア（肝炎にならずにウィルスを持ち続ける）となりますが、まれに肝がんに進行します。
- 3歳以上でうつると多くは急性肝炎を発症します。症状は全身倦怠感、黄だんなどですが、その約1～2%は劇症肝炎を発症し、劇症肝炎患者の約70%が死亡します。また、近年、急性肝炎が治ってもキャリアになる例が増えていています。

合併症

- 肝硬変 肝がん（肝がんの原因の2割はB型肝炎です。）

ワクチン

- 不活化ワクチンを3回接種します。
- 子どもの方がキャリアになりやすいので早い時期に開始することが望ましいです。他のワクチンと一緒に生後2ヶ月から接種が可能です。できるだけ集団生活に入る前にワクチンを受けましょう。

ジフテリア・百日咳・破傷風・ポリオ

ジフテリア

- 特徴と感染経路 ● 飛沫感染でおこります。

- 症状と経過 ● 発熱・のどの痛み・犬が吠えるような咳・嘔吐・のどの腫れによる窒息。

- 合併症 ● 発病から2～3週間後に菌による毒素により心筋炎や神経麻痺による呼吸麻痺をおこすことがあります。

百日咳

- 特徴と感染経路 ● 飛沫感染でおこります、長期にわたって咳がつかうことが特徴です。

- 症状と経過 ● ふつうの風邪のような症状で始まり、徐々に咳がひどくなって連続的に咳き込むようになります。咳の後、急に息を吸い込むのが特徴で、乳幼児の場合は無呼吸発作やチアノーゼを起こすことがあります。

- 合併症 ● 肺炎やけいれん・脳炎をおこすことがあります。

破傷風

- 特徴と感染経路 ● 土の中に潜んでいる破傷風菌が傷口から感染して発症します。

- 症状と経過 ● 菌の出す神経毒素により、全身の筋肉のけいれんや硬直がおこります。

- 合併症 ● 喉頭けいれんや呼吸困難などをおこし、死亡率は10～20%といわれています。

ポリオ

- 特徴と感染経路 ● 「小児マヒ」と言われる病気で、ポリオウィルスが口から入り腸で増え、脳・脊髄へと感染が広がるとマヒを起こします。

- 症状と経過 ● 風邪に似た症状から始まり、発熱・頭痛・嘔吐が見られ、その後運動マヒを残します。

- 合併症 ● まれに呼吸筋マヒで呼吸困難をおこすことがあります。

- ワクチン ● 不活化ワクチンなので、ワクチン関連マヒを起こす心配はありません。3種類のウィルスの型に対して抗体ができます。

3種混合ワクチンは、ジフテリア・百日咳・破傷風を予防する不活化ワクチンで、それにポリオワクチンを加えて4種混合ワクチンとなりました。単独ポリオワクチンと3種混合ワクチンを一緒に接種することもできます。いずれも不活化ワクチンなので、重い副反応はみとめません。生後3ヶ月になったら接種できるので、できるだけ早く接種しましょう。